

らしくって、イイじゃん！

令和8年8月27日

「ドリーム・プロジェクト」に！「ハイレベル理系研究」に！

夏休みは、高校（生）にとって大切な時間である。夏休みのような長期休暇は、「時間管理の力を身につけさせることで、児童の自己効力感を高め、学習意欲喚起につながる。＊1」ことや、「（大人も）民間企業にとっては、自己啓発の機会を拡大し、個々の能力を高める。（H12 三和総合研究所）」ことなど、私たちにとって有意義であることの研究結果が報告されている。 ＊1「児童の時間管理が長期休暇中の学習に及ぼす影響」（佐賀大、岡山大、島根大）

富士宮北高校では、面談や補習から始まり、先生たちの面倒見のよさも相まって、生徒たちが自ら充実した夏を送ろうとする姿を様々見る事ができた。今回の通信では、まずは学校外に飛び出し、輝いている生徒たちを紹介したい。1つ目。生徒自らが企画し実現する「ドリーム・プロジェクト2026」に「神田川リバーナイト～守る川から、誇れる川へ～」で応募し、採択された生徒チームがある。このチームは、7月複数回に渡って、地元の神田川・方辺川および周辺のごみ、水草の除去活動を行っている。昨年までも同様の取組を行ったようであるが、今年は、それに加え、神田川の環境保全への関心を高め、地域住民が親しみを持てるよう、9月27日に「光の演出」を計画するという。私は、酷暑と言われるこの夏休みに、ボランティア活動を行って、さらに、それをきっかけにして、地域を盛り上げる一役を担いたいとする生徒の志に胸を打たれた。

2つ目。静岡県で力を入れる理系人材育成の事業「ハイレベル理系研究」に、サイエンス部の生物班（4人チーム）が研究指定を受けた。このチームは、「富士宮市の鳥被害を減らそう」とカラスやムクドリの害鳥被害の対策に乗り出した。鳥の苦手な匂い、音、色などを探し、富士宮にあった対策を提案しようと、様々な実験を始めている。その支援に、横浜薬科大学の専門家の支援を受けながら、難しい研究にチャレンジしている。おそらく、生徒たちには“せのび”である部分はあるだろう。それでも地道に、先生たちの指導を受けながら、一歩踏み出そうとする生徒の姿はとても眩しい。どんな結果でも、きっと、このチームや、その周囲の人たちを変えるだろう。

このように学校を飛び出し、市外や県外で活躍したり、経験したりして、もう一度自分の生活を見直す。そのようなことができることが、夏休みの醍醐味だろうと思う。



方辺川での活動



神田川での活動



横浜薬科大学での発表

スポーツも、カルチャーも、「学校」というコミュニティを活用してほしい

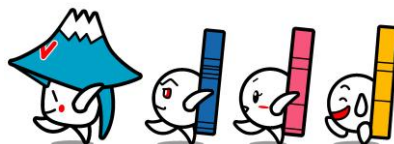
酷暑の夏休みであるが、富士宮北高校は、どの部活動も盛況である。様々な業務（教員は夏休みも忙しい）をこなしながら、部活動の指導を積極的にしていただいたことに心から感謝したい。

令和8年度から国（スポーツ庁、文科省）は、部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する「改革実行期間」に入っている。『部活動は、日本の強み』（著神谷拓 大修館書店2024）、『ブラック部活動』（著内田良 東洋館出版社2017）、『そろそろ、部活のこれからを話しませんか』（著中澤篤史 大月書店2017）などを読んだ。研究者の立ち位置と、スポーツ庁が示すガイドライン（スポーツ庁令和7年12月）を読むと簡単な解決は図れない、時間を要するだろうと思う。ここからは、私個人の意見となる。中学生に「高校生活でやりたいこと」を聞くと7割以上の生徒が「部活動」と答えている（富士・富士宮地区）。また、部活動の教育的な価値は、前述の研究者も認めるところである。富士宮北高校には魅力的な校地があり、部活動に前向きに携わっている教職員がいる。学校という施設を共有しながら、大人、子ども、全ての人の成長に寄与できる場所を作り出すことはできないか。学校施設を、とにかく魅力的にし、安心でき誰かの居場所となる空間にしたい、宮北らしく！である。

授業研究しています！静岡県総合教育センター研究に協力中！

私は、皆さんに知ってほしいことがある。令和8年度、富士宮北高校の先生たちは、ほとんどの教科で「授業改善」につながるミッションに取り組んでいる。こんな高校は、おそらくない。国語科、数学科、商業科は、静岡県総合教育センターの「学びに向かう力」を伸ばすために何ができるのか研究する。英語科は、「DX ハイスクール事業」の一環で、生成 AI を活用し、個別対応できる授業改善の取組を行っている。社会科は、社会科教科研究会事務局として、教職員の資質向上を企画している。体育科は、「生命の安全教育」という性教育に関わる事業で、保健の授業で実践を試みる。理科は前述の「ドリプロ」、「ハイレベル理系人材育成」をリードする教員と、生成 AI 活用に取り組む教員で自ら積極的に授業改善の取組をしている。これが、今の富士宮北高校である。

そして、令和8年度から、総合的な探究の時間は、新たな知見を取り入れて、地域に出ていくため、1年生から探究コーディネーターと連携し、改善に着手した。先生たちは、日々、時代に合わせ、自分たちを更新しようとチャレンジしている。9月以降も生徒たちのポテンシャルを引き出せるよう工夫をしてくれと思う。目に見えないことであるが、これからの先生たちは、きっと良い授業をしていくだろう。期待してもらいたい。



「スマホを忘れて世界が新鮮」に映った日

令和8年8月8日静岡新聞の読者のひろばで、ある高校生が投書していた。「スマホを忘れて世界が新鮮」という記事で、登校時にスマホを家に忘れたことで、自分の目の前のリアルな世界に解像度高く気づいたという。その数日前、毎日新聞は「AI 新世紀一変わる学び」として(複数回に渡って連載している)、8月5日、生成 AI が思考力に及ぼす影響について、アメリカの研究(MIT 大学)に関する記事があり、その研究成果によれば思考力の低下につながる結果が出たとのことであった。

さて、本校のビジネス部は、現在、プログラミングに関する講義を受講しながら、「小学生に対してマイクロビットを使って、プログラミングを教える」ための準備をしている。顧問の長田先生に聞くと、「すでに、ビジネス部の生徒は、プログラミングのスキルは持っている。小学生に教えるために、日本語でどのように教えるか、どのようなテキストを作って教えるか、対象を考えた時にどうするのかに対しては別のスキルが必要である」とのことであった。プログラミングは、この後、マイクロビットを搭載した「ロボット」に装着され、実際にロボットを動かしてみるという流れになるらしい。つまり、簡単な生成 AI の元を作っている作業を部活動で取り組んでいるのである。

新聞の記事で、スマホや、生成 AI のネガティブな面に気づく一方で、「誰かにわかりやすく伝える」「根本的にはどのような仕組みなのか解明する」ことに取り組む生徒、先生を見て、思ったことがある。生成 AI もやっぱり「人」を介在だ。大人→高校生→小学生へと教授する時に、大切なことは、伝える時の空気感、方法、関係性であると思う。ビジネス部が今後、どのような「先生」になっていくか、とても楽しみである。富士宮北の生徒らしく、関係性を築いて、小学生の見本となってほしいと思う。



宮北 base③「協働を築く力」

協働を築く力とは、「グローバル化や多様性が進み中で、周囲と相乗効果を生み出すための力」を考えている。これは、先生たちの目指す人間像としては、積極的に他者と関わっている姿や、前向きに人と接する姿、周囲と協力する姿を描いている。そのためには、傾聴すること、共感する気持ちを持てること、表現することが豊かであることが求められると議論があった。

1年生は、総合的な探究の時間でフィールドワークを増やしている。2年生は、いよいよ修学旅行を2学期に控えている。3年生は、それぞれの進路実現を決める時期である。この協働を築く力が試される時期だ。頑張ろう!!